

自治体の成長戦略構想を進めるには足元の地域や人間育成に目を向けるべき

2025. 01. 14 to

0. 概要

どこの地方自治体でも先行きの不安を成長路線で払拭しようと努力している。時には、バックキャティングの方法で起死回生を狙う自治体も出てきている。これに対して、著者はもっと地道に人間サードで知恵を出すべきであり、「地方の活性化は人間中心で」と主張する。

1. 問題の設定

某自治体が 10 年先の当該地のあるべき姿の策定に際し、今、直前に迫っている人口減少や少子化の問題、災害の問題、デジタル化の問題についての対処を当然どう乗り切るかといった展望のもとでの施策を骨子にしている。確かに、近未来に目標を設定してのバックキャティングアプローチには大きな期待が背負わされても、実現のムードに包まれてはいる。

しかしながら、人口減少や災害対処、デジタル化等の問題は確かに社会システムとしての施策が問われているが、これには人間がどう考え方行動しシステム的に運用するかという根本の明確化を必要としており、人間の在り方そのものの言及が急務となっている。

ここでは、そのように考えてバックキャティングのプロジェクトタイプを社会の基盤からの支援のもとで進めるならば、地道なアプローチながら、人間育成に着目し、人間の在り方から、今だからこそその視点を検討し、かかる問題についての基盤づくりの基礎を固めることにする。これをもって、本題について直接的構成でなく、間接的基盤づくりの必要性として富山の環境に根差した人間育成を主張することにした。

2. 人間育成の社会的環境からの課題

人間を育成するというと決まって教育のシステム整備が謳われるが、その前に社会と人間との相互関係性そのものが人間活動と人間育成を共になしえることに着目すべきである。ここでは、人間育成の社会的条件について今日的な条件の設定として、人間育成の個人と社会の関係性を多角的に列挙する。

(1) ウェルビーイングを個人から社会へ次元拡大；

今は、個人レベルのウェルビーイングが社会のウェルビーイングあってのものと考える段階にきている。社会レベルと個人レベルとの相対関係がシノクロして社会の一層の充実が図られる。

(2) 持続可能性を超えて世代間継承発展；

人間は世代間連続性でもってバトリーの如く人類遺産を継承発展させていく。各世代では世代内にて日常的代謝に加えて例えば 10 年程の中期的なハポンで代謝があり、さらには新世代に向けては役割交代を通して人間社会として新陳代謝がある。

(3) 足元からの市民行動が問題本質に接近；

世の中の種々の問題は、SDGs の運動を例に挙げるまでもなく、国、自治体、企業、等の取り組みもさることながら、街レベルや個人レベルからの動きも大きな力と発揮している。そこでは、個人の問題として日常的かつ身近なことで自ら動くことにより、取り組みが自分事となっている。

(4) 社会感性の各種環境下での形成；

「人間は環境をつくり、環境は人間をつくる(育てる)」といわれるよう、人間と環境の相互関係性から人間の感性が磨かれ、社会の感性へと発展していく。その環境とは、自然や社会に加えあえて人間も入れた環境とする。

(5) 生活の営みは個人と社会との繋ぎ；

生活の営みとして、人間交流や人間活動等について、コミュニティを介し個人レベル事象が社会へ積み上げられ、また社会から個人レベルへの働きかけが基礎素養の育みとなり、感性・理性や基礎力が醸成されよう。

(6) 便利さと人間性とのバランス；

DX等テクノロジは個人生活や社会における効率化を図る上でも今後さらに進展するだけに、技術制御のための倫理や哲学と共に、足元の地域・人間の範疇から自然環境や地域環境を背景に地域思考(地域人間論考)が要と考える。

また、テクノロジに関してはまずは足元の地域環境において人手テクノ(ヒューマンテクノ)がハ行クとバランスさせるようにする。

3. 地域環境のもとで人間育成、魅力創出

(1) 地域環境愛好で地方・地方人の魅力増；

どの地方でも都会と違って個性的な環境があり、これが多かれ少なかれ地方の宝となっている。地方の人間はそうした環境下で生活している。それゆえに、環境にもっと人が馴染みかつ環境と一体関係にあれば、それだけで地方・地方人が地域環境の充実として魅力を増すことになる。そのためには、地域環境との相互関係を幼少期から馴染み、これを体験の積み重ねとする。そうすれば、当該地方(県)内外において県内人が県外人との関係性を増し、県外人は当該県に思い入れを持つことになる。

(2) 子ども問題；

子ども問題を世代間継続問題として捉え、子ども育成とともに大人や地域の健全化も併せて、以下二点で対応とする。

第一点には、子どもの成長として家庭や地域の存在がそのまま素養の形成となる。例として、国語力(理解力)。これは多世代の交流や自然体験の蓄積でもって身に着く。

第二点は、子どもの自然行為の体験を増やすことであり、遊びを自由に伸ばすこと

でもある。そこには親子の関係や地域の関係もあり、自然の空間の中での自由奔放を積み重ねていく。この貴重な体験こそが地域環境のもとで育つ人間性豊かな人間といえる。親や地域も、このための余裕を作り出す社会改善が併せて要となる。

4. 人間育成の社会における展開、活動へ

上記節に記した人間の育成考を如何に展開するか。自治体はすぐにプロジェクト遂行と考えがちであるが、そうではなく、地道に社会の意識化に向けて市民・社会ともに日常活動を通していわば基礎体力形成を目指すことが肝要である。ならば、自治体は何もしなくていいということではなく、世論づくりというか市民基礎体力という素養・意識づくりを支援するようにしたいものである。自治体を始め街や企業など各種団体を含め、人間がいるところは、いつでもどこからでもコミュニケーションの声が沸き上がる雰囲気が定着してほしいものである。地方ならばそれはできると思う。

一つの例としては、それこそ口伝え・口コミといった市民がつくるコミュニケーションのコミュニティがあり、どの地方でもこの動きは少しづつ増えてきている。もちろん、目的を特化した種々団体などとの連携もある。

最後に一言。種々の問題について人間性重視を掲げることにより、地方というコンパクトさを活かして、地方だからこそ、地方が率先してやれるであろうし、だからこそプロジェクトの遂行も花開くことになると考える。